古典文学におけるホメロスの伝統

佐藤　義詮

伝承の風化

ギリシヤ語のエペ、英語のＥＰＩＣは日本語では叙事詩と訳される。日本語の叙事詩の意味は、辞書によると「事実をありのままに述べた韻文」ということであるが、Ｒ・Ｃ・ジェブは、アリストテレスの「詩学」を引用して、叙事詩とは音楽の伴奏で歌う抒情詩、所作を伴う劇詩と区別して、単に韻文で朗唱される詩であると説明している。

即ち、日本語での叙事詩は、「事実をありのままに」という内容に重きを置くが、アリストテレスは、事実の記述を問うのでなくて、㈠厳粛なテーマとか、㈡その有機的統一とか、㈢秩序ある進行とか、物語の発展形式をより以上重視しているようである。

したがって「歴史と叙事詩を同一視してはならない」のに「叙事詩人の大半は、歴史と叙事詩の区別を殆んどしない」とアリストテレスはいっている。

さらに彼はその区別を「歴史が韻文で書かれてもそれは叙事詩ではない」とさえいっているが、これは全く日本語の―あるいは日本人が意味するところの―叙事詩とは全く反対であって、文体によらない詩の問題をとり上げている。

わたしたちは、ギリシヤ人の叙事詩といっているものを理解するために、彼等の意味する「詩」について知らなければならない。

アリストテレスによれば、すべて詩と呼ばれるものは「模倣の様式」であり、それが「リズムと言葉とハーモニー」という三つのものを媒材として表現されるという形式論を述べている。

この模倣という言葉は、人間の行為の何事かを真似ることでなく、人間の経験によって作られるイマジネーションであって、内容は虚構であってもいいのである。なぜなら叙事詩もまた悲劇と同じように「急転、発見ならびに苦悩の場面を必要とする」といっているからである。

これが彼の文学思想であろう。

ホメロスの叙事詩について具体的にいえば、トロイの戦いが全くの絵そらごとであってもいいのである。

しかし、トロイの戦いが全くの空想でなかったことが、十九世紀にハインリッヒ、シュリーマンによって証明された今日においては、紀元前四世紀のアリストテレスの見解が詩論としてでなく古代文学の歴史に一つの支点を与えるものと考えられる。

シュリーマンの評伝を書き彼の著作撰を集めたヴィラント・シュミートはその書物の題名を「ホメロスなくしてトロヤなし」としているが、このことはホメロスを歴史として読んだという意味である。またこの見解を進むるならば、トロヤなくしてホメロスなしともいえないことはない。もしアリストテレスが微塵もホメロスの作品に歴史の痕跡を感じなかったとすれば、ホメロスから彼の時代に至る間に一言でいえば歴史が風化して叙事詩となったともいえないだろうか。

文字が一般に普及していなかった未開時代においては、事実を後代に伝える方法はなかった。それは言葉である。

今日でも人間の世代は必ずしも科学や理性だけの時代ではない。まして生存のための恐怖や願望によって創られた神々の支配する遠い昔にあっては、自然現象にもなにか超人間的な解釈が加えられたことは当然であろう。プラトーンの「ソクラテスの弁明」は彼が瀆神—あるいは無神論者としての裁きに答えるものであるが、ソクラテスにとっては、過去の神々は既に死滅していたのではないだろうか。むしろプラトーンの哲学は、過去の世界における神々の消滅を確認することから始まったと考えてもいい。したがってホメロスの作品のなかで活躍した英雄たちの悲劇は、人間に共通に与えられる運命の生々しさであっても、このなかの歴史的事実は、影のうすれた演劇的舞台にすぎないとしか考えられなかった。

よってこの作品が個人の手になるものであれ、民族的な説話の伝承であれ、ながい時代を経て、それを合理的に解釈しようとするなら、そこには歴史の波—事実が誤って伝えられても、それを事実と信じて新しい歴史が作られるような繰り返しがあるかも知れない。

擬人化された神々や英雄たちの働きは、我々が体験的に理解の出来ない呪術的要因とか、風習に基づいている。古代の人々にとってそれが合理的なものであっても、時代を経るにしたがって単なる情緒としてしか理解されないだろう。もともと文学の世界は、理性から感情への展開であって詩と真実とが表裏一体をなしている。

「大初にロゴスありき」という。ロゴスは文字通り言葉の意味である。ロゴスで始まる人間の生活も言葉によってのみ作られたものではないが、文学の歴史は言葉を除外しては考えられない。

けれども言葉はやがて文字によっても代用されるに至った。言葉と文字との結合は、人が時間と空間とを考えるようになった最初の知恵である。言葉はいつも現実的であり、言葉のわかるすべての人達に通用する。しかし文字は、今日でも澤山の文盲の人達がいることを思うと、読むこともそれほど容易ではなかろうし、言葉の表現であっても複数の人達に伝えられるほどパピルスが普及していなかった。おそらく文字が共通語を表現するようになるまでには、言葉が文字になるプロセスと同じようにながい時日を要したであろう。

さて、言葉には話し言葉と歌い言葉があるが、何事かを言葉として伝える場合には伝承者は強い記憶力を必要とする。その記憶を容易にするために、物語に抑揚や音節が工夫される。それが詩の一つの分野としての叙事詩ではないだろうか。

文字のない時代の吟遊詩人の原型は、ホメロスのオデスセイアに現れているイタカのブェミアスである。彼は叙事詩人の原型である。

詩の起原にはいろいろの説があるが、いづれにしても祭式歌謡—労働歌も祝婚歌も含めて—であったことには違いないと思うが、宮廷に従属する伶人である場合、王たるものの願望を歌うことであって—あるいは事実に基づいた願望の表現といってもよいが、事実を報告することではなかった。

ここに事実という言葉を用いたのは、今我々が詩と呼んでいるものが、古代人にとって想像上の世界と混交していても、それは作為によるものでなく、ある種の事実として存在したであろうことは前にも述べた通りであるが、それを伝承するために記憶に便利でもあり、表現を強調する方法として詩形が生まれたと考えることが出来ないであろうか。

単に散文的な物語の表現では内容も変形しやすいのは筋書きを語るに止まるが、リズムのある文章—叙事詩となるとリズムに抑制されて筋も逸脱することもなく守られるのである。事実の裏打ちがないから叙事詩という

形式で承認されているが、そのテーマになり進行はその詩の創作者に限らず伝承者であっても多少の改竄はされたのであろう。

アルビン・レスキイはそのギリシヤ文学史のなか、「ホメロスの叙事詩」の始めに「『ホメロスの問題』[注(一)]を暗示しないでホメロスを語ることは今日では不可能である」としているが、これは書かれた作品、文字による伝承を常に主体とせざるをえないからである。

F・G・ケニオンは「古代の書物」のなかで、グロートの「ギリシヤ史」を引用して、「貨幣も文字も絵画も彫刻も芸術的建物もホメロスやヘシオドスの時代にはなかった」とはっきり無条件に言い切っていることを紹介している。[注(二)]

つづいて、「彼の考えによれば、紀元前九世紀に、と彼は言う。文字に書かれたながい詩があったということは到底あり得べからざることだ」と書き加えている。

では、ホメロスの時代の文字の有無を論じることは、ホメロスと彼の名で伝えられた叙事詩との関係をどのように意味づけるのであろうか。

ホメロスの時代は一体いつの頃のことであろうか、またホメロスの時代と呼んでいるのは、彼の作品を通じて考えられるべきであるのか、たとえば彼を紀元前九世紀前後としているのは、作品の成立年代から推定しているのか、トロイの戦争を歴史の投影として考えそれによっているものなのか、あるいはホメロスなる詩人の生存時代を証拠とするものか、もっと広く一般的文化の推移から考えるのか、諸種の観点があろう。

アリストテレスのいう叙事詩は、悲劇と同様なる種類としているが、それは壮大なる韻脚をもって荘重なる問題を模倣する限りに於て悲劇と一致するといい、その差異については「その長さと韻律との点」とか「行動者がわれわれの眼前に現われてこない」とか「悲劇ほどの統一性をもたない」などをあげている。しかも統一がないという時、「われわれは数多の行動を仕組んだ叙事詩を意味する」が故に「叙事詩人の如何なる作からも数々の悲劇が作られる事実」から証拠があげられるというのである。

アリストテレスが詩論において、しばしば悲劇と叙事詩を比較している理由は、その構成の相似性に重きをおいているからであるが、歴史との比較については「韻文と散文との差別にあるのではなく、一方は実際にあったことを描き他の一方はあり得ることを描く点にある」

したがって「それ故詩は歴史よりも、より以上に哲学的であり、より以上壮重である、なんとならば詩はむしろ普遍性を描き、歴史は個性を描くからである。

叙事詩をこのように悲劇と歴史とに対比しての考え方には、叙事詩即ちホメロスの作品の虚構性を暗示するものと解していい。

私が伝承の風化というのは、歴史が―あるいはある種の事実と考えられたものが―ながい時間の経過によって伝承化する場合、その時代時代の社会性に応じて改変されたであろうことを考えて、その伝承の仕方からホメロスの作品を把握することは不可能かどうかという点にある。

ホメリダイ

もし文字の未だ存在しなかった頃にトロイの叙事詩が作られたという仮定が考えられるなら、口頭による伝承が数世紀にわたって行われたと想像することも不可能ではあるまい。それは、ホメロスから始まってホメリ、つぎにホメリダイという言葉である。

ホメリダイという言葉が現われた現存の最も古い文献は、ピンダロスの十一編の「ネメア頌歌」の第二編「アカルナイのテイモムスのために」という頌歌である。

ピンダロスは紀元前五二二年にテーバイ、又はその近くにダイファンツスの子として生まれギリシア最大の抒情詩人と称されている。ネメア

頌歌という一連のものはネメアの競技の勝利者を讃えて歌ったものの総称である。

ギリシアには国民的な祝祭の行事として四つの著名な競技があった。その一つは今日オリムピック大会として復活されているオリムピア祭で、これはオリムピアの地でヘラクレスによって始められたものとされその第一回は紀元前七七六年に始まり四年毎に開催された。その第一回の年がオリムピアード第一年でギリシア歴年をあらわしている。その勝利者の栄冠はデルプォイの神託によってオリーブの冠が与えられた。

その二のピュティア祭は紀元前五八二年に始まったものでデルプォイで八年毎に行われ堅琴や堅笛などの演奏を主としたいわば音楽祭である。

その三のイストミア祭はコリントのイストミアで行われ、四番目のネメア祭はアルゴリスのネメアの行事であった。

先に述べたネメア頌歌に見いだされる「ホメリダイ」なる言葉は「ホメロスの子供たち」の意味に英訳されているようであるが、そのピンダロスの注釈者は彼等はホメロスの詩を朗誦するラプソディストをさしている。おそらくホメロスの詩を朗誦するのを代々の業として受け継いだ者達の意味である。

ここに示された言葉には二重の意味がある、一つはホメロス家の子孫ということと、他にホメロスの詩の朗誦者ということ、この二つが結びつけられているがこのことを私は注目したい。

ホメリダイという言葉が、ホメロスの家系の者でなく、ある場合はホメロスの生まれた土地と伝えられるキオスの者達がトロイの叙事詩を伝承したことによって、ホメロスの名前を襲用したと考えることも出来るし、あるいは単にもっと広くトロイア系史詩の伝承者をさしたものなどいろいろの解釈が生じてくる。

プラトオンの「プァイドロス」にあるこの言葉を岩波本「プラトオン全集」の訳者は「ホメロス語り」と訳しその注に「ホメロスの血派を引き、その世襲の権利によってホメロスの詩を吟唱することを許されていたもの達の呼び名（後にはその血派関係による制限はなくなった）であるが、彼等はホメロスに関する特別な専門的知識をもっていて、一般に流布されたテキストにはのってない秘儀的な詩句を知っていた」と書いておる。

ホメリダイなる言葉についての精細な解釈はPAULYS REAL—ENCYCLOPADIE DER CLASSISCHEN ALTERTUMSWISSENSCHAFT に完璧な文献をもって書かれているので、余計な想像は許されないかも知れないが引用した注にあるような「一般に流布されたテクストにはのっていない秘儀的な詩句を知っていた」ということをホメロス以後トロイア系史詩の口唱的伝承者、「ホメロス語り」がイリアスとオデュスセイアの初期の作者達だと私は信じたい。

第一に、文字のない時代のホメロスを考える。文字があったとしてもあの長編の詩を文字にすることの困難な時代、そして文字について今日ほど親しみのない時代という背景を考えるべきであること、第二には叙事詩という定形—それは長短々格という単純なものであっても、寧ろそれが故に物語を暗記するためには容易であったろうこと、第三には「ホメロス語り」はテクストにのっていない部分をもそれを改定する権利があったということなど考えるとホメリダイが創作者の一員であったとしても不思議でない。

今日のテクストというのは、イリアスやオデュスセイアの説話の知識を背景として作られたソフォクレスやその他の悲劇作家の時代に文字としてどの程度普及化されていたのであろうか。

さきに引用したケニオンの見解はホメロスの時代を決定するのに重要な関係をもっているが、「それ故にわたくしは穏健な批判は『イリアス』と『オデュスセイア』は文字を用いて綴られ、その文字に書かれた写が存在して、吟唱者の朗唱の助けとなり、またその本人の変異を抑制したと認む

べきであると信ずる」といっているのは不可解である。

ケニオンの説は、グロートの見解を引用しながら、他のいろいろの文献からみた説であろうが、その根拠としては、ギリシア文字の伝来がフェニキアからテーバイの王カドモスがアルファベットをギリシアに移入した時代に始まったという仮説にもとづいている。そしてカドモスの年代を紀元前一三五〇―一三〇〇とし、一方トロイ陥落の伝統的年代を前一一八四年、または一一八三年であってこれがヒッタイト王国の記録の示すところと一致していると述べている。

一方ホメロスの生存の時代は紀元前一〇七五年から八七五年頃までと諸説があるがクリントン（F.H.CLINTON 1781–1852）はその中間、紀元前九七五年頃の人としているが、これはアリストテレスの見解に沿うものである。

バウラ（C.M.BOWRA）はヘロドトスの歴史第二部五三節にあるように、ホメロスが九世紀後半の人でヘシオドスと同時代という説を承認しながらも八世紀の末期の人としている。

したがって、ケニオンが「ホメロスの詩が文字によって書きくだされたという説に味方する論拠は圧倒的に有力なように思われる」といいながらも、他の国の英雄叙事詩の例をひいて「こういう長い詩を暗記するという芸当が信じられないというのではない、結局は穏健な批判は・・・」と前に書いているのが了解に苦しむのである。

わたくしはホメロスの叙事詩については文字説――少くともホメロス自身の手になる―でなくて口唱説を考えたいのであるが、勿論これは、ホメロスの実在を信ずればのことであって、ホメリダイを書かれた叙事詩と共存する中間継承者と考えるのではなくて、ホメロス及びホメリダイが形成したものが、イリアスとオデュスセイアを、少くともパピルスとして書かれたものになるまでの作者と想像するのである。

注

注(一)　「ホメロスの問題」については、ここに和辻哲郎「ホメーロス批判」（昭和二十二年、要書房）から「ホメーロスの詩についての伝承および論争」から問題点を抜粋して次に要約しておく。

その第一は、人としてホメーロスに関する古い伝説

第二は、ホメーロスの詩についての伝承

「古い伝承によると、ホメーロスの詩と称せられるものは、『イリアス』と『オデュスセイア』のみではなかった。のちに「叙事詩の輪」（エピコーン・キュクロス」と総称せられた数多くの叙事詩―今はただわずかの断片しか残っているに過ぎないが、もとはトロイアおよびテーバイを中心とする伝説を次々に歌ったものである十篇の叙事詩はみなホメーロスの詩だったのである。（中略）以上のごとくホメーロスの作を弁別する努力はあったにしても「叙事詩の輪」に属する十篇の叙事詩の他に、なほ「マルギテス」など六篇の詩、「ホメーロス讃歌」三十三篇、ホメーロスの短詩など、ホメーロスに帰せられた作品は多いのである。しかるに時代が下がるにしたがって漸次ホメーロスの作品は減少し、ついに『イリアス』と『オデュスセイア』とに限られるに至った。プラトーンの引用はただこの二作のみである。（中略）

そこで問題は『イリアス』と『オデュスセイア』とに集中する。何ゆえにこの二作のみが多くの叙事詩の中から選び出されてホメーロスの眞作とされたのである。もしそれがこれらの詩の美しさや全編の力強い統一に起因するとすれば、このやうに長い詩が文字の使用せられる以前から今のような形で口誦しつつ伝えられたということは果たしてありうることであろうか。（以下略）

第三に、ホメーロスの詩の異本の問題を取り上げる。これを証拠だてているのは、古い写本（パピリ）と古代の著作家の引用句である。

まず写本について言ふと、ホメーロスの詩の断片的な写本は二百種に達すると言われている。そのうち『イリアス』の写本は『オデュスセイア』のそれの二倍である。それらのうち八つは紀元前百五十年よりも古い。最初に発見せられたのはピートリ写本であるが、これは不完全ながら『イリアス』第十一歌五〇二―三七を含み、紀元前二世紀初頭のものである。

（中略）

では古代の著作家の引用句はどうであろうか。ピッポグラテース、アイススキネス、ピンダロスなどが言及しあるいは引用したホメーロスの詩句は現在のホメーロスの詩の中には、全然見あたらぬか、あるいは著るしく異なって現われている。もっと新しい人でも、クセノフォーン引用句で今のホメーロスの詩にないものがある。しかしもっとも著しいのはアリストテレスである。彼は非常に多くホメーロスの詩を引用しているが、それらの中には現在の本文に全然見られない詩句が少なくない。またたとひ今の本文にあっても非常に違った形で引用されている。（中略）

したがって、紀元前四世紀には現在のとよほど違った本文が行なわれていたと認めざるを得ないであろう。（中略）

以上のような事情からして我々はホメーロスのテキストが紀元前四世紀三世紀においてはなほ固定しておらず、辞句の変遷がなほ行なわれつつあった、ということを認めなくてはならない。（中略）

ホメーロスの叙事詩のテキストが以上のごとく不安定であったとすれば、アレキサンドリアの学者達が原典批判の仕事を始めた所以も、容易に理解されるであろう。（中略）

文芸復興期以来ホメーロスの詩は再び研究の対象となり、イタリアの歴史哲学者ヴィコにおいてのようにホメーロスの新しい解釈が学問上の重要な意義を有するに至ったのであるが、ホメーロス批判の仕事として全然新しい生面を開いたのは、何と言ってもフリードリッヒ・アウブスト・ヴォルフ（1759年～1824年）の巧績と言わねばならぬ。

ヴォルフは、「ホメーロス序説」（PROLEGOMENA AD・HOMERUM・1795）によって新しくホメーロスに関する論争を開いた。すなわち彼は、千七百八十八年にフランスのヴィルアソンによって始めて発表された『イリアス』の側註付きテキスト、ヴェネチア本 Aに刺激されてこういう説をとったのである。『イリアス』や『オデュスセイア』はいずれも唯一の作者の作ではなくして、多くの歌人の作である。それらの多くの古い歌を統一的な全体にまとめあげたのは、作の出来上った時よりも数世紀の後の有名でない人々、ペイシストラトスの任命した文学委員達であった。これがヴォルフの主張の主旨である。彼はこれを厳密な本文批判によって証明したのではなく古くから言い伝えられた疑しい伝説と文字のない時代にこんな長い叙事詩を制作することは不可能であるということに基づいて結論したのであった。（中略）

その後二十四年の間にはあまり進歩はなかったが、さらにそれ以後に至って続々としてホメーロスの詩の成り立ちかたについての仮説が現われ始めた。それらを大別すると次の四通りになる。㈠増広説あるいは進化説（説明略）㈡歌謡説あるいは集合説、粘着説（説明略）㈢挿入説（説明略）㈣編集説（説明略）

注㈠　こういう断定に対しマルクス、エンゲルス「芸術論」上巻、滝崎安之助訳（岩波書店）の「家族、私的領有および国家の起源」から次のことを引用しておく。

『未開時代の発展の上部段階から生まれた最初の精華はホメーロスの詩編、とくに『イリアス』に現われている。発達した鉄製の道具…ホメーロスの叙事詩、神話の全体―これらのものこそ、ギリシヤ人が未開時代から人命時代の遺産として受け取った主要なものである。